

ボエーム・バヴェルク

馬場啓之助

ボエーム・バヴェルクとオースタリ学派

ボエーム・バヴェルク Eugen von Böhm-Bawerk (1851～1914) は、ウィーザー Friedrich von Wieser (1951～1926) とともに、メンガー Carl Menger (1840～1921) がその『国民経済学原理』 *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* (Wien: 1871) において提唱した新しい価値理論を土台として、オースタリ学派の経済理論の体系をうちたてていった経済学者として知られている。ウィーザーがその『自然的価値』 *Der natürliche Wert* (Wien: 1889) において、メンガーの価値理論を限界効用説として整理するとともに、これを帰属説を手がかりとして、生産分配の理論にまで拡充していったのたいして、ボエーム・バヴェルクは、その『資本の積極理論』 *Positive Theorie des Kapitals* (Innsbruck: 1889) に基づく、メンガーの資本理

論を修正しながら、新しい資本理論を展開していった。いずれもメンガーの『国民経済学原理』で示唆された方法論にたって、経済理論の体系を編成替えしていくうえに、大きな貢献をなしたのである。かれらの二つの主著が公刊された一八八九年は、オースタリ学派が経済学界においてその地歩を確立した年次であるともいえよう。そのかん、メンガーはシエモラーとのあいだに方法論争を展開しているが、経済理論の固有の領域においてはその研究成果をほとんど発表していない。学派の理論的活動の中心となったのは、ウィーザーとボエーム・バヴェルクであり、また学派の理論の普及に効果をあげたのは、主としてボエーム・バヴェルクであった。ボエーム・バヴェルクは、「経済的財価値の基礎理論」 *Grundsätze der Theorie des wirtschaftlichen Güterwerts*,

Conrads Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik(1886) によって、限界効用説を体系的に解説し、また「オースタリ学派の経済学者」*Austrian Economists, Annals of the American Academy of Political and Social Science* (1891) において学派の方法論的視点を説明して、オースタリ学派への理解をたすけた。メンガーの『国民経済学原理』は初版刊行以後、その再刷もおこなわれていなかった⁽¹⁾し、ウィーザーの著書は難解であったので、ボエーム・バヴェルクの解説論文はこの学派の理論を知るよい手がかりをあたえ、同時代の外国の学者から、かれはオースタリ学派の代表的学者と目されるようになった。さらに現代の経済理論から顧みても、かれの資本理論は特別の意義をもっている。

ボエーム・バヴェルクの資本理論は、ウィクセル *Wicksell* (1851~1926) によって整理されて、近代経済学における代表的な理論の一つとなるが、この理論は現代の成長理論のうちにも摂取されて、今日もなおその意義を失ってはいない⁽²⁾。ウィーザーの価値理論が、ワルラスIIパレート流の均衡理論にくらべて、現代の経済理論によって顧みられる機会が少なくなったのに、資本理論

の分野においては、ウィクセル理論をとおしてボエーム・バヴェルクの影響がいまなお生きているのである。現代的意義という視点からも、ボエーム・バヴェルクはオースタリ学派の代表的な学者といつてよいであろう。

ボエーム・バヴェルクとウィーザーは、一八五一年に、いずれもオースタリの高級官吏の家庭に生れ、やがて古い伝統をもつショテン・ギムナジウムにまなんで同級生としての交わりを結ぶ。ウィーザーは両親から芸術家的資質を受けつぎ、思索的な性向をもった人柄であり、ボエームは年少から物理学に興味をもち、これを専攻したい志望をもっていたが、いずれも高級官吏の子弟として官途につくことをよぎなくされ、ウィーン大学に進んで法律を学ぶことになる。かれらはこの大学でローレンツ・シュタインから経済学を学ぶが、卒業を間近かにした一八七二年にメンガーの『国民経済学原理』に接して大きな感銘をおぼえる。ウィーザーの表現によれば、この書物のうちに経済学研究のための「アルキメデスの点」を見出したのである。かれらはその経済学研究への意欲を高める契機を、そこにつかんだとみて差支えないであろう。

メンガーはこの同じ年に『国民経済学原理』の業績をもってウィーン大学の講師になるが、ボエームとウィーザーはその開講をまたずに卒業して官途についていった。かれらは学生として直接メンガーの教示をうけたわけではなかったが、やがてメンガー理論の拡充発展に努める機会に恵まれることになる。かれらは一八七五年から一八七七年にかけて、経済学研究のためドイツ留学をゆるされて、ハイデルベルヒのクニース、ライプツヒのローシャー、イエナのヒルデブラントといったドイツ歴史学派の代表的な学者について研究をつづける。メンガーに心酔していたかれらの研究にたいして、これらの学者たちは、十分な理解を示すことはなかったが、一八七六年かれらはクニースのゼミナールにおいて、注目すべき研究を発表する。

ウィーザーは、メンガーの価値理論を整理し拡充して、その主著『自然的価値』への展開を約束する研究を発表し、ボエームはその資本理論への準備的研究を報告する。ボエームの研究は、一八八一年に『国民経済的財理論の視点からみた権利および契約』*Rechte und Verhältnisse vom Standpunkte der volkswirtschaftlichen Güterlehre*

(Jmsbruck: 1881)として刊行され、これによってインスブルック大学の員外教授に任ぜられるが、おかれて一八八四年には、ウィーザーの研究もまた『経済価値の根源と主要法則』*Ursprung und Hauptgesetze des wirtschaftlichen Wertes* (Wien: 1884)として刊行され、かれもウィーン大学の講師となる。このように二人の若い経済学者は、それぞれ経済学界に足がかりを得て、メンガーがシュモラーと方法論争をおこなっているあいだに、経済理論の研究に専念して、主著をまとめあげていった。そしてオースタリ学派を形成していったのである。

オースタリ学派の経済理論には、いくつかの共通の特徴がある。第一に、経済分析の方法として、経済主体の行動に重点をおくことである。ボエーム・バヴェルクによれば、古典学派が経済分析において財と財との関係に注目したの⁽³⁾にたいして、オースタリ学派は財と主体との関係を重視している。この財と主体との関係を規定するものを、メンガーは「経済性原理」としてつかんだ。これは主体の評価体験のうちに潜む特殊な合理性である。この体験の合理性に注目することこそ、経済理論にとってその方法論の基礎となると考えて、メンガーはその

『国民経済学原理』をこの点の解明を中心として書きあげていったのである。

第二は、経済理論は経済の本質を説明することをねらいとすべきものであり、しかもこの本質を認識することは可能だとの確信をいだいていたことである。経済現象に内面的な統一をあたえ、経済という領域を明確に限定しているのは、経済性原理である。これはさまざまな経済的経験を集積することによって帰納的にとらえる努力をするまでもなく、われわれの体験を内省することによって演繹的につかめるのだ。

第三は、経済性原理は経済財の評価体験をとおしてあらわれるものであるが、このはたらきはある種類の財の総体にたいしてではなく、その財の具体的な——それも限界的な——単位について評価を加えるさいの行動に注目してこそ、初めてこれを明白にとらえることができる⁽⁴⁾のだ。経済分析は限界分析を重視しなくてはならない。ところで、限界分析は数理解析的方法を用いることによってその機能を十分に発揮することができる⁽⁵⁾と考えるものもあるようであるが、オースタリ学派の経済学者はいずれもこの方法にたよることは経済分析としては邪道で

あるとして、これをつよく排している⁽⁶⁾。

第四に、経済学の自律性をつよく考えたことである。

かれらは、経済理論を歴史や政策から明確に分離して、これを純粋理論として追及していこうとした。メンガーは経済事情に通暁していたし、ウィーザーは商務大臣として、またポエームリバヴェルクは大蔵大臣として政策担当の責任のある地位についているが、いずれも経済理論の探究にあたっては、理論としての純粋さをあくまでも貫こうとした。

経済主体の体験に注目して、演繹法を用い限界分析を駆使して経済現象の本質を純粋に追及すること——これがオースタリ学派の特徴であり、メンガー、ウィーザー、ポエームリバヴェルクはいずれもこの特徴をもっていたが、ただそのあらわれかたにはそれぞれの人柄からくるニュアンスの相違がないわけではなかった。メンガーが社会科学方法論上の研究をとおしてこの特徴に説明を加えようとして、これに多大の時間とエネルギーを傾注したのたいして、ウィーザーとポエームリバヴェルクは方法論的研究に深入りすることは経済学者の本務ではないと考えた。さらにまた、ウィーザーとポエームリ

バヴェルクのあいだにも、その理論研究の態度のうえでかなりの差異があった。

ウィーザーは内省的で思索的なタイプであったが、ボエームニバヴェルクは批判的で活動的な人柄であった。ウィーザーはオースタリ学派のうちでドイツ観念論の哲学的方法に最も接近していた学者であった。⁽⁶⁾ 全体がたをいきいきと感得しながら、その種々相を論理の内面的な発展をおして、なんとか表現しようと苦心を重ねていった人であるから、かれは他人の学説をいちいちとりあげてこれを批判する余裕をもたなかった。ところが、ボエームニバヴェルクのばあいは、その理論を展開する視点が定まると、既往の学説をこの視角からいちいち批判していっており、他人の学説を批判することで、自己の理論の獨創性を浮き彫りにしようとしたとでもいいたい趣きがあって、ウィーザーのばあいは異なった感じを受けるのである。ボエームニバヴェルクは他人の学説にみられる概念のあいまいさと戦い、現象を的確にとらえる概念を明快にうちたてることに努力を傾けた。これにたいして、ウィーザーは詩的直観によってとらえた理念をなんとか概念化しようとする苦闘をつづけていっ

た。学者としてのタイプがはつきり異なっていたように思う。

ウィーザーが価値理論の探求に献身したのは、この研究がその理論の建設にとって基本的なものであると考えたからであろう。ところが、ボエームニバヴェルクが、価値理論をメンガーから摂取し、この土台のうえに自己の資本理論を展開することに専念したのは、資本理論の実際上の重要さを考慮してのことであった。資本利子の問題は資本主義を理解するために基本的に重要なものであり、「社会問題」の解決にも役立つという実際上の意義も大きい。この点を勘案して、かれはその問題を選定しているのである。⁽⁸⁾

さらに両者の相違点を示すもうひとつの事情がある。ボエームニバヴェルクはその『資本の積極理論』で自己の理論を提唱しおわると、生涯その理論を守りつづけ、その理論の新しい展開といったものをほとんど残していない。⁽⁹⁾ その理論は、明確な概念規定のうえに自己完結的な論理を展開したものである。これによって資本と資本利子の本質を解明しつくしたと、ボエームニバヴェルクはつよい確信をもっていたのであろう。これにたいし

て、内面的な論理の発展を重んじたウィーザーは、『自然的価値』を刊行してから二十五年のうちに『社会経済論』 *Theorie der gesellschaftlichen Wirtschaft* (Tübingen: 1914) を著わして、社会的視野をもとり入れた壮大な体系を展開していった。ホーームリン・ヴェルクの資本理論が社会学的フレイム・ワークを無視した静学理論であるのにならして、ウィーザーの新しい体系は経済社会的な幅をもったものである。ここにも二人の資質の相違が反映しているといつてよいであろう。しかしもちろんこれは理論家としてのタイプの相違を示すもので、その優劣をきめるものではない。

(1) メンガーが『国民経済学原理』の初版の再刷に反対して「たごい」またその再版がその生存中に刊行されなかったことなどについて、ウィクセルの興味深い解説がある。ご参考を参照された。

Knut Wicksell, *The New Edition of Menger's Grundsätze* [1924] *Selected Papers on Economic Theory of Knut Wicksell*, Erik Lindahl ed. (London: 1958) pp. 193~203.

(2) 馬場啓之助稿「クヌット・ウィクセル」(『一橋論叢』第四十三卷第四号所収) 参照。

(3) Böhm-Bawerk, *The Austrian Economists* [1891],

Shorter Classics of Böhm-Bawerk (Libertarian Press: 1962) Vol. 1, pp. 19~21.

(4) ウィーザーはこの意味で、「社会科学におけるロマンティックな革新」だとかうっている。ご参考を参照された。

Ludwig von Mises, *Epistemological Problems of Economics* (Princeton: 1960) p. 153

(5) Emil Kauder, *Intellectual and Political Roots of the Older Austrian School*, *Zeitschrift für Nationalökonomie*, XVIII, 4 (1958) S. 412.

(6) カウダー教授は、メンガーの方法論がドイツ観念論の哲学的方法から影響を受けたとする解釈(杉村広蔵博士『経済哲学の基本問題』岩波 昭一〇)に反対して「これを存在論的方法であると主張しているが、ウィーザーについてはニュートンであることはミンメルに近づくとを認めている。同教授稿前掲論文四一六ページを参照。

(7) F. A. von Hayek, Friedrich von Wieser. [1926] *Development of Economic Thought*, Spiegel ed. (New York: 1952) pp. 564~565.

(8) Böhm-Bawerk, *Whether Legal Rights and Relationship are Economic Goods?* [1881] *Shorter Classics of Böhm-Bawerk*, Vol. 1, p. 33, pp. 131~138.

(9) 『資本の積極理論』以後「ホーームリン・ヴェルク理論の発展を示すものとして」は、むしろむしろその「勢力対経済法則」*Macht oder ökonomisches Gesetz?* *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*, Bd.

XXIII (Dec. 1914) SS. 205~271 をあげることができ、ここでかれは、企業の独占的な力ないし労働組合の組織力が賃金決定にあたって、限界生産力説のとくところから、ある幅をもって乖離していく可能性があることを明らかにしている。しかしもちろんそれだからといって、経済法則の探求が不要だということではない。その乖離を明確にするためにも、基準となるのは経済法則だからである。

ボーームニバヴェルクの資本理論

一八八一年インスブルック大学の員外教授に就任したボーームニバヴェルクは、一八八四年に正教授に昇任され、一八八九年大蔵省に転出するまで、この地位にとどまった。このインスブルック大学在職の九年間は、ボーームニバヴェルクの資本理論の形成にとって意義深い期間であった。

『国民経済的財理論の視点からみた権利および契約』において、資本理論の展開を究極の目標としており、これはそれにいたる準備的研究にすぎないことを宣言したボーームニバヴェルクは、一八八四年にその『資本と資本利子』*Kapital und Kapitalzins* 三部作の第一部『資本利子論の歴史と批判』*Geschichte und Kritik der Kapitalzins-*

Theorien (Innsbruck: 1884) を刊行し、既往の資本理論を広範に検討したのちに、一八八九年にその第二部『資本の積極理論』を発表した。その第三部『資本の積極理論補論』*Eskurse zur "Positiven Theorie des Kapitals"* (Innsbruck: 1909~1912; Published as vol. III, Jena: 1921) が刊行されたのは、一九〇四年官界から再び学界へ復帰してからのことであるが、かれの資本理論の核心は第二部のうちにもられているので、インスブルック在任九年のあいだにその理論はほぼ完成していたとみてよいであろう。

ボーームニバヴェルクが資本と資本利子の問題を、その経済学研究の中心のテーマに選んだのは、それが資本主義社会を理解するうえで基礎的な理論を用意することになると考えたからである。しかもこの問題にかんしては従来の経済理論はいずれも満足すべき解答をあたえていない。そう考えてかれは、その『資本利子論の歴史と批判』において、既往の理論を網羅的に批判していった。文献渉獵の広範さ、論点整理の巧妙さ、批判の明快さにおいて、かれが抜群の才能をもっていることを、この著書を読むすべてのものは感じないわけにいかないで

あるが、しかしだからといって、かれのあまりに批判的な評価の仕かたに十分同感するとはかぎらない。かれは既往の理論はすべて誤まっているとして、批判のための批判といったかたよりが、そこに潜んでいると感ずるものも少なくないであろう。⁽²⁾ただその批判のうちで、マルクスにたいする批判は、その批判の適否を別にしても、かれの問題への接近の仕かたを側面から解明するの役に立つところが多い点で、われわれの興味をささうものがある。

マルクスもまた、資本利子成立の根拠を吟味することが、資本主義社会を分析するうえで基本的に重要であるとみていた。⁽³⁾ポエームリバヴェルクと同じ問題提起の仕かたをしていた。⁽³⁾しかし提唱された理論はもちろん異なっていた。マルクス理論にたいするポエームリバヴェルクの批判は、かれの分析の視点がマルクスとどのような点で異なっていたかを明らかにする手がかりをあたえてくれるとみてよいであろう。

ポエームリバヴェルクのマルクス批判は、その『資本利子論の歴史と批判』の第十二章で展開されているが、これはさらに「マルクス体系の終焉」Zum Abschluss des

Marx'schen System (1896) においていっそう詳細に展開される。⁽⁴⁾ポエームリバヴェルクはここで、マルクス価値論をもっては資本制生産をささえる企業の行動を解明できないことを批判しようとする。かれがとりあげた論点は、マルクスの価値法則と生産者価格の形成とのあいだの矛盾である。この矛盾をめぐって詳細な検討を加えているが、その中核となるのは、マルクスが生産に投下される労働量のみを考慮して、その投入の仕かた、とくに生産期間の長短について考慮を加えていない点にたいする批判である。たとえば、A商品が五年間にわたって中間生産物を生産したのちに六年末に最終消費財として完成されたのにたいして、B商品は中間生産物を經由しないで直接消費財として一年で生産されたとしたばあい、もし1A=6Bで交換されるとすれば、だれがA商品の生産にあたって平均三年間の耐忍をおこなうであろうか。⁽⁵⁾これがポエームリバヴェルクのマルクス理論にたいする基本的な疑問である。かれは生産期間の異なることは生産方法の変化することにはかならないが、どの生産方法を採用するか、その選択の合理的な根拠を追及することがなくては、資本制生産の性格は理解できないとみたの

である。

このような批判を展開するにあたって、ボエームニバヴェルクが、マルクスが価値形態の展開から平均利潤率の成立にいたる論理的過程の解明に駆使した弁証法の特徴にかんして、十分な注意を払っていないことは忘れてはならないであろう。したがってその批判は、内在的批判というより、すでに自己の方法を確立したものがその視点から、外在的に他の理論を批判しているといった傾向がつよい。ボエームニバヴェルクの資本制生産にたいする基本的見解は、マルクスとは異なって、生産方法の選択という企業者の機能を重視したものであった。

ボエームニバヴェルクは、資本を中間生産物である具体的資本財としてとらえる。これは労働や土地と異なつて、生産されたものであり、本源的な生産力をもつものではないが、なお生産行程においてある種の機能をはたしている。この点にかんじてかれは、つぎの三点を強調している。すなわち、(イ)資本はより有利な生産方法を採用することを可能にするものではあるが、それはよりよい生産方法の指標ではあつても、その原因ではない。(ロ)資本は本源的な生産要素である労働と土地の

はたらきを最終消費財によりよく体现させ結実させるところの「中間的原因」にすぎない。(ハ)資本はすでに採用されている以外の有利な方法を新たに導入することを可能にする「間接的原因」にすぎないのだ。

このように資本はそれに固有の生産性をもつものではないが、つぎの三つの意味においては生産的であるといえる。すなわち(イ)生産行程において役割をはたしており、(ロ)生産方法を迂回化し、生産期間の延長を可能にし、また、(ハ)新しいよりよい生産方法の採用を可能にするからである。

資本が生産行程の迂回化を可能にすることは明らかであるが、迂回生産がすなわち生産性の高い生産方法であるとはいえない、といった批判は、ボエームニバヴェルク理論にしばしば加えられるところであるが、かれはこの点については、生産期間を延長しなくては生産性を高めることができな⁽⁶⁾いことこそ、資本制生産の特徴であると答えている。じじつ生産期間の長いものがかならず生産性が高いわけではない。生産期間が短かくてもなお生産性の高い方法もあろう。しかしこのような生産方法はいち早く採用されてしまうはずであるから、新たに採用

しようとしても、選択可能な範囲にははいつてこない。選択できるのは、生産期間の長さに対応して生産性が高くなるような関連をもっている一群の生産方法だけである。したがって資本投入の能否が、より生産性の高い方法を採用できるかいなかを決定する基本的な条件となるのだ。もっとも、技術の革新によっては、新たに生産期間が短かくしかも生産性の高いような方法が出現するかも知れないが、そのような方法はたちまち採用しつくされてしまい、やがて生産期間を延長しなくては、もはや生産性をあげられない状態になる。それが資本制生産にとっては、正常な状態なのだ。こういう状態のもとで、資本は「生産的」な機能をはたすわけである。

ポエームリバヴェルクは、このような資本制生産の状況を念頭において、資本と資本利子の問題を、企業の生産方法の選択の仕かたと関連させて説明していった。そこにかれの資本理論の新しい貢献がみられるのである。資本と資本利子の問題は、資本制生産の特徴と結びつけてのみ、これが説明をおこなうことができるという分析視点こそ、ウィクセルを媒介として現代の成長理論へ継承されたポエームリバヴェルク理論の業績である。しか

しかれば、この理論を展開するにあたって、オースタリ学派の本質論者としての伝統に従って、資本と資本利子の本質をどう規定するかといった問題に深入りしていった、その理論に独特なニュアンスをあたえる——あえていえば、多少の混乱を招き、いささか無用な論争の種をまいた——ことになる。

資本は具体的な資本財からなっており、資本財は財の存在形態の一種にはかならないから、資本と資本利子の問題を説明していくためには、(イ)資本財は財の存在形態としてどのような特徴をもっているか、(ロ)このような存在形態は経済主体のどのような行動と結びついてあらわれてきたのか、また、(ハ)このような存在形態にたいしてどのような評価の仕かたがなされるのか、といった問いに答えていかななくてはならない。

第一の資本財の財としての存在形態については、メンガーの高次財・低次財の理論が説明の手がかりとなる。資本財は明らかに高次財である。ただポエームリバヴェルクは、高次財という概念は誤解を招くおそれがあると見て、これを「より間接的な次元の財」と定義しなおしている。そしてこれにかんしてはつぎの二つの定理がた

てられる。⁽⁷⁾すなわち(イ)間接的な次元の財の効用は、それがその生産に寄与するであろうすべてのより直接的な次元に属する財の総体の効用から導きだされるものであり、したがって(ロ)間接的な次元の財の効用は、それがその生産に寄与するところの直接的な次元の財の価値から派生するものである。このようにして資本財は最終消費財の生産に、直接間接役立つかぎりにおいて、その効用をもち、その価値は最終消費財の価値から派生するものであるが、資本財が最終消費財として完成するまでには時間がかかるので、その効用は将来の効用であり、その価値は将来の価値であるといつてよいであろう。資本財はこの意味において将来財であることになる。

第二、将来財としての資本財が存在するようになるのは、もちろん経済主体が将来にわたって配慮するからであるが、ボエームニバヴェルクは、さらにこれを現在財と将来財との交換が成立するからであると説明する。そしてなぜ現在財と将来財との交換がなされるかといえれば、その相対価値の評価において各人のあいだに差異があるからにほかならないとする。

第三、現在財と将来財との価値評価の差異、すなわちその相対価値の評価差が利子にほかならない。したがって同一の効用をもつ現在財と将来財とのあいだになぜ価値評価の差異がおこるかを説明すれば、それによって「利子の根源」が説明されたことになる。この価値評価の差異を説明するものとして、ボエームニバヴェルクはつぎの三つの根拠をあげる。⁽⁸⁾すなわち第一は、欲求とその充足手段との関連にかんして将来と現在とは状況判断が異なることである。現在における充足手段の過剰は将来に繰り越すことができるが、将来の過剰は現在に繰り入れることはできないといった事情もあって、将来の状況を現在の状況ほど深刻には判断しない傾向がある。第二は、将来の効用の時差割引である。この時差割引は、(イ)将来を現在ほどいきいきと思ひ浮べえない想像力の不足、(ロ)人生の不可測さからおこる将来の不確実性、(ハ)現在の欲求をおさえがたくする意志のよわさに由来するものである。第三は、「現在財の技術的有利性」とよばれたものである。かれはこれを、現在資本財を投入すれば生産期間を迂回化し、迂回生産の利益を享受できるゆえんを、算術的例解を用いて説明するか

たちで、論証しようとしているが、これについてはポルトキヴィッツなどから批判を受け、論争のもととなった。しかしこれは、かれの資本制生産の基本的特徴にかんする見解と直接関連するもので、その資本理論の核心となるものなのである。

これら三つの根拠によって、将来財と現在財との価値評価に差異が生まれ、利子の成立すべき根源が形づくられるが、この評価差についてもさらに各人のあいだに差異があるので、現在財と将来財の交換がおこなわれ、利子率が決定されることになる。しかし三つの根拠のうち、状況判断の差異にかんしては、他の二つの根拠ほど明確に断定できるわけではない。たとえば、やがて定年退職をすると予定されているものにとっては、将来の状況の方が現在よりも深刻に判断されることも十分にありうることである。そしてこの状況判断の差異は、利子成立の根拠としてかならずしも不可欠なものではない。他の二つの根拠、すなわち時差割引と迂回生産の利益によって、利子成立の根拠を十分説明できるし、またその作用によって利子率の決定を説明できるのである。

現在財と将来財との相対価値の評価にかんして各人の

あいだに差異があるから、両財の交換がおこなわれ、利子率が決定されると、ポエームハバヴェルクは説明するが、将来財を引当てて現在財を提供するものを資本の貸手とし、その逆のものを資本の借手とみて、市場において限界的な貸手と借手との対応のあいだから利子率が決定されるとの説明を企てている。しかしこの説明は、かれの資本制生産の基本的特徴にかんする見解とどう関連するのか明白ではない。しかもかれは、この説明のあとで、もう一度企業の行動と関連させて、利子率の決定のメカニズムを説明しているのである。それは資本制生産の状況を念頭においての解明であり、かれの貢献はこの分野にあるものと考えられる。この解明においては、時差割引は資本の供給を制約する条件とみなされ、迂回生産の利益は資本の需要を規定する要因とされるが、資本制生産の成立にとっては後者の要因がはるかに重要な意味をもっているのである。迂回生産の利益を活用し、利潤を極大にしようとするのは企業者であるが、その行動の解明において、かれの資本理論は新しい分野を開拓していったのである。

現行の技術体系のもとで、いくつかの生産期間を異に

する生産方法が選択可能であるとすれば、企業者はそのうちから利潤率を極大にするような方法を選ぶはずである。その選択の仕かたをかはらばつぎのように説明しようとする。まず代表的企業にとって利用可能な資本額が一定であるとし、賃金率もあたえられているとしよう。この条件のもとでは、生産期間の長い生産方法を選択すれば、労働者一人あたり利潤額は増大するが、労働者雇用数は逆に減少していくことになるから、この相反するうごきのなかから利潤率を極大にするような生産期間と労働者雇用数とが決定される。そしてそのさいの利潤率も決定されてくる。ところでこのような各企業の雇用数の総計が総労働力人口と合致し、完全雇用を実現させるものであれば、労働力の需給は均衡し、賃金率は変化しないが、もしそうでなければ賃金率は変動する。そして新しい賃金率のもとで、企業はもう一度生産期間と労働者雇用数を決定しなおす。このような調整作用がくり返えされていけば、完全雇用に対応する最適な生産方法、したがってまた利潤率が決定されてくる。そしてこの利潤率が資本にたいする需要価格を決定することになるのだ。

利用可能な資本が既存のものとしてあたえられておれば、資本利子率は、いま述べたような仕かたで決定されるところの利潤率に合致していくことになる。しかし利用可能な資本が資本の供給行動と結びついて変化するものであるとすれば、需要価格としての利潤率の方が供給価格としての利子率より高いようなばあいには、資本の供給額は増大していくし、逆のばあいには減少していくことになる。資本供給が増大するばあいには、それともなつて、より生産期間の長い生産方法が選択されていくわけである。逆は逆である。このようにして、資本需給の調節と生産方法の選択がおこなわれていき、均衡が成立することになる。

ボームニバヴェルクは、その資本理論の展開にあたって、オースタリ学派の慣行に従つて、数理解析的な方法の採用を拒否している。マルクスのばあいと同じく、算術的な例解を用いて、その理論を説明しているが、ウィクセルが、その『価値・資本および地代』*Über Wert, Kapital und Rente nach den neueren nationalökonomischen Theorien* (Jena: 1893) において、これに数理解析的な吟味を加えているところからも知られるように、その理論

は論理的に矛盾性をもつてゐる。(11)

(1) ボヘートロヒンズヘンとは「著者がこればかりを考へなかつたは、理論化を企てたうとて、純粹な探求心のためではなく、むしろ實際的な必要に役立つとて、確信があつたがためである。すなわち……ひじやうに實際上重要な主題、すなわち資本と利子の学説を研究してゐる過程で考へざるを得なかつたのである」(註文による) (Böhm-Bawerk, *Whether Legal Rights and Relationship are Economic Goods?* *op. cit.*, p. 33)。

(2) 『資本利子論の歴史と批判』を学説史的研究としてみたつて、第一級の価値を認めようとするマッペンターの評價である (J. A. Schumpeter, *Eugen von Böhm-Bawerk [1914] The Development of Economic Thought*, H. W. Spiegel ed., New York 1952, p. 574)。(註文の理解を授けようとする著者の手になる学説批判史は、学説史として適正な理解を求めたものとはなりがたうと、マッペンターの評價を示すにまよひなく、(T. W. Hutchison, *A Review of Economic Doctrines, 1870~1929*, Oxford 1953, p. 168)。

(3) J. A. Schumpeter, *Eugen von Böhm-Bawerk [1914] The Development of Economic Thought*, Spiegel ed., p. 575.

(4) マッペンターは、これを認めようとするマッペン批判のうちに、最良のものと認め、評価してゐる (J. A. Schumpeter, *op.*

cit., p. 579)。この評価は、その論議のあふらぬものである。

(5) Böhm-Bawerk, *Zum Abschluss des Marxschen Systems*. [1896] *Kleiner Abhandlungen über Kapital und Zins*, herausgeb. von F. X. Weiss (Wien u. Leipzig: 1926) S. 359.

(6) Böhm-Bawerk, *Positive Theory of Capital* (Libertarian Press: 1959) Bk. II, Chap. IV The Function of Capital in Production. pp. 95~101; further refer to: *his Further Essays on Capital and Interest* (Libertarian Press: 1959) Essays I.

(7) Böhm-Bawerk, *Whether Legal Rights and Relationships are Economic Goods?* *op. cit.*, p. 100.

(8) Böhm-Bawerk, *Positive Theory of Capital*, Bk. IV, chap. 1, pp. 257~285.

(9) Böhm-Bawerk, *op. cit.*, Bk. IV, Chap. 1, pp. 286~289.

(10) Böhm-Bawerk, *op. cit.* Bk. IV, Chap. 11, pp. 297~312.

(11) 馬場啓之助著『近代経済学方法論』(勤草書房 昭三

五) 八八~九二ページ) において、筆者はボヘートロヒンズヘルクの資本理論の骨子を定式化してみた。筆者の定式化はウィットセルのそれを簡明なかにかえたものである。

資本理論をめぐる批判と反批判

一八八九年『資本の積極理論』を刊行してのち、ボエームニバヴェルクは、インスブルック大学を去って、大蔵省に関係し、一八九五年、一八九七年および一九〇〇〜一九〇四年の三回にわたって大蔵大臣に就任して、経済自由主義にたった政策を推進しようとしたが、一九〇四年にはウィーン大学教授として学界に復帰して、その資本理論をめぐる批判に答え、数多くの論文をかいていく。これらはあつめられて『資本の積極理論補論』を形づくることになる。

『資本と資本利子』三部作は、ボエームニバヴェルクの学者としての生涯の大半を覆う大作である。かれはこの大作をかきあげるためにその時間とエネルギーを惜しみなく注いだ。それはマルクスの『資本論』に匹敵するような歴大な述作である。しかしその体系をささえる理論は、ボエームニバヴェルクじしんが述べているように、⁽¹⁾簡明なものであり、それを叙述するだけであれば、それほど紙幅を要しない。その著述が歴大なものとなつたのは、学界に資本理論について誤つた学説がおこなわれており、ボエームニバヴェルク理論にかんして筋違

いの批判が盛んであったためである。『資本の積極理論補論』に収められた論文は、じつに多くの批判にいちいち丹念に論駁を加えている。ボエームニバヴェルク資本理論が当時の経済学界においていかに大きな問題提起をおこなったかを、これから推察することができるが、これらの批判と反批判が資本理論の推進にどれだけ積極的な貢献をしたかという点になると、疑問を狭む余地が多分にある。批判の多くは誤解に由来しており、ボエームニバヴェルクの反批判がまた誤解のないように自説を修正するよりも、自説を固守するためにかかっているからである。ウィクセルも、この資本論争がボエームニバヴェルク理論にたいする理解の不足からおこつた傾向がつよかつたと述べている。⁽²⁾しかしこの論争の主要な論点について説明しておこう。

第一は、資本概念をめぐるクラークとの論争である。⁽³⁾クラークは、(イ)「具体的な資本財」は生産行程において消耗していくが、「真正の資本」はこの消耗を補填しながら永続していく「永久的な資金」からなっており、(ロ)この「真正の資本」については生産期間は考えられない、それは「すべての経済行動とその収果を同時化

する「力をもっているからであると主張する。これにたいしてポエームリバヴェルクは、(イ)生産行程において役割をはたしているのは「具体的な資本財」であり、「真正の資本」などというのは比喩にすぎない、また、(ロ)資本財に前もって労働が投入されていてこそ、消費財に投入された労働が収果をあげるのので、「同時化」などということはありません」と反批判を加える。この論争は、一九三〇年代に、ハイエク対ナイトのあいだの論争として再燃する点でも、注目に値するが、ポエームリバヴェルクの資本概念が狭きに失することが、このような論争を呼びおこしたことは、ここで註釈しておく必要がある。

利子は明らかに貨幣現象であり、「具体的な資本財」にたいして支払われるものではないから、資本を「具体的な資本財」に限定することは狭義にすぎない。また「時差割引」と関連して、資本の供給を論ずるさいにも、供給されるものは、「具体的な資本財」ではないはずである。クラークの批判にそのまま従う必要はないとしても、ポエームリバヴェルクは自己の資本概念について再反省してみるのが適當であったように思う。しかしかれ

の自説にたいするつよい確信は、この再反省の道をとぎしてしまつた。

第二は、「迂回生産の利益」にかんするポルトキヴィッツの批判である。⁽⁵⁾ポエームリバヴェルクは、現在資本財を投入した方が、来年投入するよりも、生産期間が長くなるから、生産性が向上すると説いたのにたいして、ポルトキヴィッツは、生産完了の時期を一年おくらせさえすれば、そうはいえないではないかと批判した。これは、ポエームリバヴェルクの資本制生産にたいする基本的見解をポルトキヴィッツが十分に理解していなかつた——あるいは、ポエームリバヴェルクが「具体的な資本財」の投入の時期にこだわりすぎたため、その理解を困難にした——ためにおこつた誤解に由来するといつてよい。資本の利用可能性がよりよい生産方法の採用を制約している状況を念頭においてみれば、資本の借入れが生産性を向上させる手段となるのは明白なことである。

第三は、フィッシャーの批判である。⁽⁶⁾フィッシャーは、利子成立の根拠を説明するには、「迂回生産の利益」をもちだす必要はなく、「時差割引」だけで十分であると主張してポエームリバヴェルク説を批判した。かれは、貸

借は「所得のながれ」の時間的配分を変化させるものだという視点にたつて、市場利率より高い利率を想定していた人々は、資金を借入れてその所得のながれを調節するし、逆に市場利率より低い利率を想定していた人々は、資金を貸付けてこれまたその所得のながれを調整しようとするであろうから、そのかんにおのずから貸借が均衡し、利率が決定されるようなうごきがおこってくる。かれは、なにも「迂回生産の利益」などをもつてくる必要はない、人々の想定する利率、すなわちその「時差割引」と市場利率とのあいだの相互調整のメカニズムだけに注目すれば、それで十分であるとす。これにたいしてボエームニバヴェルクは、フィシャー説は利子率決定のメカニズムにたいする説明はできるにしても、利子率がなぜ存在するか、その本質的な根拠は説明できない、その説明には時差割引と並んで「迂回生産の利益」をあげなくてはならないと反批判を加えて、自説を主張しつづけている。

ボエームニバヴェルクは、その資本理論にたいして数多くの批判を受けたが、自説を再反省してみようとするよりも、これを再主張することに努めた。自説にたいす

る確信には、動搖はなかつた。批判を加えられれば加えられるほど、『資本と資本利子』の第三部が膨脹していつて、この三部作はいよいよ龐大なものとなつていった。それはボエームニバヴェルクの資本理論の理解をたすけるよりも、かえつてその印象を不分明にしていつたと、ウィクセルはなげいているが、たしかにその弊はあつたようである。しかしその反面、どんな批判にも屈せず、克明に反批判をかいて倦むところを知らないボエームニバヴェルクの剛毅な姿は、いよいよ明確な線を描いて、くつきりと浮びあがってくる。かれはじつに颯爽と活躍した学者であつた。一九一四年、かれはオースタリリハンガリー帝国没落の不幸を見ずに、華やかな時代に生きて、この世を去つていつた。

(1) Böhm-Bawerk, *Positive Theory of Capital*. (Libertarian Press: 1959) Preface to the First Edition, p. 385.

(2) Knut Wicksell, Böhm-Bawerk's Theory of Capital. [1911] *Collected Papers on Economic Theory of Knut Wicksell*, E. Lindahl ed., p. 176.

(3) J. B. Clark, The Genesis of Capital, *Yale Review* Nov. 1893; Böhm-Bawerk, Professor Clark's Views

- on the Genesis of Capital [Quarterly Journ. of Economics, Bd. IX, pp. 113~131] *Kleiner Abhandlungen über Kapital und Zins*, herausgeb. von Weiss, 1926. SS. 63~69.
- (4) F. A von Hayek, The Mythology of Capital [Quarterly Journ. of Economics, 1935~1936] AEA, *Readings in the Theory of Income Distribution* (London: 1961) pp. 355~383.
- (5) L. von Bortkiewicz, Der kardinal Fehler der Böhm-Barverkian Zinstheorie. *Schnollers's Jahrbuch*, Bd. XXX, 1906; Böhm-Bawerk *Further Essays on Capital and Interest* (Libertarian Press: 1959), Essay XII, A.
- (6) Irving Fisher, Böhm-Bawerk's Theory, *Rate of Interest* (N. Y.: 1907) Chap. IV; Böhm-Bawerk, *op. cit.* Essay XII, B.
- (7) Knut Wicksell, Böhm-Bawerk's Theory of Capital, *op. cit.*, p. 178.

(一橋大学教授)